

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：藤村 励子（人間発達研究コース）

| |
|--|
| ■ 研究題目 |
| 大学生の類似性認知が障害者の心的状態の推測方略の移行に与える影響 |
| ■ 研究代表者・分担者 氏名 |
| 藤村励子（人間発達研究コース）（代表者） |
| ■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など） |
| <p>目的</p> <p>他者の心的状態を推測する際には、投影とステレオタイプ化（以下、ST化）の2つの方略が使用される（Ames, 2004）。投影とは、自分の心的状態を他者に適用することで推測する方略であり、ST化とは集団の一般的特性についての既存の信念（ステレオタイプ）に基づいて推測する方略である（Ames, Weber, & Zou, 2012）。先行研究により、これらの方略は状況に応じて使い分けられていることが示唆されてきたが、Ames（2004）は標的人物との類似性が方略の使い分けに影響を与えることを示した。すなわち、類似性の高い他者には投影を使用し、類似性の低い他者にはST化を使用する。これを類似性随伴性モデル（以下、SCM）という。藤村（2018）は、SCMの検証を通して、身体障害者の心的状態を健常者がどのように推測しているのかを検討した。その結果、類似性の高低にかかわらずST化を使用していることが示された。本研究では、大学生の類似性の認知を操作的に高めることにより、障害者の心的状態を推測する際の方略の移行が可能かどうかを検証した。</p> |
| <p>実施内容</p> <p>1. 回答者</p> <p>X県内の大学生203名を対象とした。回答に欠損のある24名を除外した。有効回答者は179名だった。性別は男性7名、女性172名だった。学年は1年生86名、2年生89名、3年生4名だった。平均年齢は19.2歳（$SD=0.76$）だった。</p> <p>2. 手続き</p> <p>無記名式の質問紙実験を行った。大学の講義終了後に研究協力の依頼をし、その場で</p> |

一斉に配布・回収した。所要時間は約10分だった。質問紙は2種類あり、①標的人物との類似点を記述させる課題が含まれるものと、②課題が含まれないものを用意し、ランダムに配布した。なお、本研究は東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した（承認ID：19-1-038）。

3. 質問紙の構成

I. 回答者の属性

まず、回答者の年齢と性別を記入させた。次に、障害者に対する関心度と接触経験について尋ねた。障害者に対する関心度は、「全く関心がない」から「非常に関心がある」までの5件法で回答させた。障害者との接触経験については、最初に接触経験の有無を回答させた後、「接触有」と回答した者に対して接触経験の内容について複数選択法で回答を求めた。選択肢は、①家族や親戚にいる、②友人にいる、③街や学校で見かけた程度、④ボランティアに参加した、⑤その他（自由記述）である。

II. 標的人物への類似性の認知

標的人物についての紹介文を読ませた後、標的人物に対してどれくらい類似性を認知したかを「全く似てない」から「非常に似ている」の5件法で回答させた。質問紙は2種類あり、①紹介文の中から回答者自身と標的人物とで似ている部分を2つ記述させる課題があるもの（類似性操作群）と、②課題がなく、ただ紹介文を読んで標的人物への類似性の認知を回答させるもの（類似性非操作群）をランダムに配布した。

III. 心的状態の推測課題

標的人物が登場する文章を読んで、①標的人物、②回答者自身、③標的集団の典型的成員の心的状態を推測させた。①では、「このときAさん（標的人物）はどのように感じたと思いますか」と尋ね、8つの質問項目に対して、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で回答させた。②では、「あなただったら同じ状況でどのように思いますか」と尋ね、8つの質問項目に回答させた。質問項目は主語を変えただけで、内容は①と同じものを使用した。③では、「世間一般に、障害者は特有のステレオタイプをもたれています。典型的な身体障害者だったら、どのように回答すると思いますか」と尋ね、同様に8つの質問項目に回答させた。なお、文章および質問項目は、藤村（2018）のものを使用した。

IV. 社会的望ましき尺度（24項目）

谷（2008）のバランス型社会的望ましき反応尺度日本語版（BIDR-J）を使用した。24の質問項目について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5件法で

回答させた。なお、本研究のいずれの指標にも社会的望ましさと有意な相関がみられなかったため、以下では社会的望ましさの影響を含めずに分析を行った。

4. 分析方法

I. 方略の指標得点の算出

投影の指標得点：①標的人物の心的状態の8項目から、②回答者自身の心的状態の8項目を各項目ずつ差し引いた。それらを二乗した後、差を平均化した。

ST化の指標得点：①標的人物の心的状態の8項目から、③標的集団の典型的成員の心的状態の8項目を各項目ずつ差し引き、二乗した後に差を平均化した。

なお、各指標とも得点が低いほどその方略を用いていることを示す。

II. 分析

投影とST化の指標得点を従属変数として、課題の有無(2)を参加者間要因、方略(2：投影・ST化)を参加者内要因とする混合要因分散分析を行った。

結果

混合要因分散分析の結果、方略の主効果が有意だった($F(1, 177) = 20.99, p < .001, \eta^2 = .10$)。課題の主効果および課題と方略の交互作用は認められなかった。すなわち、課題の有無にかかわらず、本研究の回答者は投影を使用したことが示された。混合要因分散分析の結果をTable 1にまとめた。

Table 1. 課題の有無と方略の混合要因分散分析の結果

| 課題 | 投影 | ST化 | 主効果 (F 値) | | 交互作用 (F 値) |
|--------------------|----------------|----------------|-----------|-----|---------------|
| | M (SD) | M (SD) | 方略 | 課題 | |
| 有：類似性操作 (n=87) | 1.18 (1.40) | 2.30 (3.08) | 20.9* | .02 | .01 |
| 無：類似性非操作 (n=92) | 1.25 (1.25) | 2.30 (2.93) | | | |

$p < .001^*$

今後の課題

本研究では、藤村(2018)とステレオタイプに関する先行研究から、障害者の心的状態を推測する際にはST化が使用されると想定した。Ames(2004)の実験では、類似点を記述させた群は投影を使用し、相違点を記述させた群はST化を使用した。以上より、本研究では類似点を記述させる課題がある群は投影を使用し、課題がない群はST

化を使用すると想定して質問紙実験を行った。しかしながら、回答者は課題の有無にかかわらず、投影を使用した。その理由として、サンプルの偏りが考えられる。本研究の回答者は保育系の学科に所属しており、ほとんどが実習や講義で障害者と交流していた。また、回答者の多くが女性だった。河内（2001）によると、大学生のもつ身体障害者に対するイメージには回答者の性別と専攻（所属学科）によって違いがあった。障害者に対する態度研究においても、女性の方が男性よりも態度がポジティブであることが示されている（Dunn, 2015, p.62）。Davis（2017）は、心的状態の推測方略の使い分けには類似性だけでなく標的人物への好意も影響することを示している。態度には好き嫌いといった感情的成分も含まれるため、上記の個人要因が心的状態の推測においても影響した可能性がある。しかしながら、今回のデータだけでは検討することは難しいため、同じ大学の別の学科の大学生を対象に再調査を行ったり、藤村（2018）のデータと比較検討したりする必要があるだろう。

文献

- Ames, D. R. (2004) Inside the mind reader's tool kit: Projection and stereotyping in mental state inference. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 340-353.
- Ames, D. A., Weber, E. U., & Zou, X. (2012) Mind-reading in strategic interaction: The impact of perceived similarity on projection and stereotyping. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 117, 96-110.
- Davis, M. H. (2017) Social projection to liked and disliked targets: The role of perceived similarity. *Journal of Experimental Social Psychology*, 70, 286-293.
- Dunn, D. S. (2015) *The social psychology of disability*. New York: Oxford University Press.
- 藤村 励子 (2018) 大学生における類似性認知が肢体不自由者の心的状態の推測方略に与える影響—類似性随伴性モデルに基づく検証—. 東北大学大学院教育学研究科平成29年度特定研究論文 I .
- 河内清彦 (2001) 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造—性及び専攻学科との関連—. *教育心理学研究*, 49, 81-90.
- 谷伊織 (2008) バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, 17, 18-28.